

南洋関与の論理

1. 研究組織

研究代表者：小島 勝（龍谷大学文学部・教授）

研究分担者：清水 元（長崎県立大学大学院経済学研究科・教授）

蔡 史君（津田塾大学学芸学部国際関係学科・助教授）

波多野澄雄（筑波大学社会科学系・助教授）

早瀬 晋三（大阪市立大学文学部・助教授）

2. 研究のねらい・目的

（1）日本の「南方関与」に関する研究は、矢野暢著『「南進」の系譜』（中公新書、1975）によって開始されたが、これを契機に「南進論・政治過程」、「軍事」、「経済進出」、「移民・在留邦人社会」、「人権・道義的観点」、「交流」、「現地の人々の見方」などと分類される領域で、急速に研究が進捗してきた（小島勝「『南進』の系譜以後」矢野暢編『講座東南アジア学10 東南アジアと日本』[弘文堂、1991]参照）。近年の成果は、前掲『講座東南アジア学10 東南アジアと日本』であるが、矢野氏が提起した問題意識である①「アジア主義」との非連続性、②明治時代の「無告の民」への評価、③大正時代の「南進論」の特質、④大東亜共栄圏構想と南方関与との関連性、⑤戦後の日本人の東南アジア進出につきまとう精神性と戦前の「南進」との連続性、⑥南方関与を行なった個々の日本人や個々の進出企業の個別研究という課題の追究は今なお進行中であり、われわれの共同研究もこの研究課題を継承している。

「南方関与研究」は、日本人の東南アジア地域研究の基本的研究姿勢を問いつけるエトスを内蔵しているが、より広角的・精緻な事実の発掘とそこに通底する論理の析出への努力を行ないたい。

矢野氏によれば、「南方関与」とは、「日本人の南方との自然な関わり方の総体」のことであり、この「南方関与」が国策と結びついて、侵略的傾向を帯びた局面が「南進」であるとするが、この見解は今日広く定着している。「からゆきさん」や民間の商人、商社・銀行・メーカーの経済人ないし企業人、政治家や軍人、教育者や僧侶など多くの日本人が、「南方」すなわち現在の東南アジア地域と関わったが、その関わり方に脈打つ「論理」をより総合的・重層的に鮮明にし、今後の東南アジアとの関わり方の指針を把握したい。

（2）この究明の仕方として、まず第1に、日本国内の政治・経済・軍事・教育・文化などとの関わり方の論理の追究ということがある。政治・経済・軍事・教育・文化は各々独自の論理

を内包しながら、その時代の「南方関与」の制度化と連関している。第2に、「日本の南方関与」と言っても、ここの「日本」には、本土の日本人、沖縄県人、日本統治時代の台湾・朝鮮人、日本人との婚姻関係をもつ者およびその子弟、さらには北米などの日系人などがあり、そこにはそれぞれ特有の南方関与の論理があったであろう。この解明も重要な視点を提供する。第3に、「南方」の中での地域差にもとづく「論理」の比較対照がある。大陸部と島嶼部、植民地宗主国別などである。そして第4に、日本人の職種別・社会階層別の「論理」の比較対照ということがある。第1～第4は相互に関係性をもっているが、これらが時代相の変化に応じていかなるダイナミクスを描いたのか、その絡みをより広角的・重層的に事実に基づいて理論化したいと考える。

(3) 清水元は、主として経済的側面から「南進論」や「東南アジア」概念、「環太平洋構想の原型」について、古代から遡る日本の南方関与の歴史を「海の論理」から説き解そうとする。蔡史君は、マレーシア・シンガポール地域を中心に現地サイドから、台湾人の活動などを通して日本の軍事侵略と文化工作の真相に迫る。また波多野澄雄は、日本陸海軍の南進構想・戦略と現実の外交磁場との連関を、今まで明らかにされなかった史実を発掘しながら日本の南方に関する「外交・軍事の論理」を究明する。早瀬晋三は、フィリピン渡航者のデータ分析などを通して、「南進」ではない民間人の「南方関与」の属性を調べ、そこにおける論理を明らかにする。小島勝は、在外子弟教育の制度化過程を主として分析しながら、「教育」の側面から日本人の南方との関わりに潜む論理を析出する。

3. 平成7年度の研究経過

(1) 第1回研究会：6月24日(土)～25日(日) 場所：静岡県下田市ベイ・クロシオホテル

今年度の研究計画についての打ち合わせ会およびこれまでの各自の研究経過について、報告と討議を行なった。

今年度は最終年度にあたるため、①年度末に報告書原稿を執筆すること、②各自の研究発表を、鹿児島大学南太平洋海域研究センターにおける公開シンポジウムの形で行なうこと、③発表題目は、清水元「『アジア主義』と『南方関与』－第一次大戦期を中心として」、波多野澄雄「戦時『アジア新秩序論』と戦後構想」、早瀬晋三「明治期『南進論』と『大東亜共栄圏』」、小島勝「『南方関与』と教育問題」とすること、④日時は、9月16日(土)午後2時から6時までとすることなどを決定した。

(2) 第2回研究会：9月16日(土) 場所：鹿児島大学稲盛会館

午後2時より6時まで、鹿児島大学南太平洋海域研究センターにおける公開シンポジウムにおいて、清水元・波多野澄雄・早瀬晋三が研究発表を行なった。それぞれの発表要旨は、以下の通りである。

i) 清水元「『アジア主義』と『南方関与』－第一次大戦期を中心として」

①矢野暢氏が「南方関与」という造語を用いたのは、政治学のコミットメントの訳語であったと思われるが、「交流」でもなく、「関係」でもない、「関与」という言葉には、日本と東南アジアとの間に、相互性や相関性が欠如して、日本が主体で東南アジアが客体であるという一方的な関わりを表わす意味がこめられていたと考えられる。

②日本側からの一方的な関与とこの関与を正統化する論理・イデオロギーを「南進論」と呼ぶわけである。

③南進論が沸騰したのは、a 明治の中頃の1880年代から90年代にかけて、b 明治の末から大正の初期の1910年代、c 昭和前期の1930年代にかけての大東亜戦争に入っていく時期の3回である。

④矢野暢氏は、「南進論とアジア主義は別物であって、アジア主義的発想よりも当時の欧米の外交思想と噛み合っている。日本人の南方関与はアジア主義的特質に乏しく、日本の朝鮮半島および中国との関わりと東南アジアとの関わりは本質的に違うのではないか」という問題提起をしているが、この命題は、明治中期の第一期の南進論には当てはまるが、その後の南進論ではアジア主義と区別できないものになって、最終的には大東亜共栄圏の概念に融解していくと私は考えている。

⑤近代日本の対外思想を生み出した磁場を構成していた基層的条件として、a 「帝国主義」の国際秩序、b 日本の西欧的国家システムへの参入、c ヨーロッパ起源でない人種の国としての日本が唯一の列強になったことがある。

⑥この磁場ではたらいっていたモメント・ベクトルとしては、a 国際性・近代化、b 膨張性、c 人種主義があった。

⑦国際化・近代化のモメントが圧倒的であったが、日本は近代化・西洋化すればするほど日本でなくなっていくという自家撞着があり、失っていくものに対する哀惜の情、西欧近代文明への反感があった。

⑧竹内好はアジア主義について、「ある実質内容を備えた、客観的に限定できる思想ではなくて、一つの傾向性ともいべきもの」と定義しているが、私は、この傾向性・心性そのものが

アジア主義であるとは思わないが、アジア主義を生み出す基盤になったものとして着目することは正しいと考えている。

⑨アジア主義は、近代化の力、脱亜入欧、欧米協調主義に対する反作用・反動であった。したがって、もともと積極的な思想内容をもっていなかった。

⑩この反作用・反動として、人種主義のモメントが導入されたのではないか。

⑪そして、西欧の文明の原理・パワーポリティクスに対して、儒教の徳治の概念によるモラルポリティクスという傾向が現われた。

⑫しかし、アジア主義の根底には西欧に対する屈辱的な現実認識があり、西欧から身を守ろうとする防衛的性格、消極的性格がある。「進取経略論」・「航海遠略論」にもこれがあり、アジアに勢力を拡張しつつ西欧諸国に対抗して日本の独立を確保するという、「攘夷のための開国論」が明治期のアジア主義者に濃厚に受け継がれている。

⑬「脱亜主義」と「アジア主義」・「興亜」を二項対立的に捉えるこれまでの図式には、修正が必要なのではないか。福沢諭吉の「脱亜論」は、自ら唱えていた東洋盟主論型の「朝鮮改造論」・「朝鮮進出論」からの撤退宣言であって「アジア侵略論」の出発点ではなく、樽井藤吉の「大東合邦論」もそれほど非侵略主義的な平等を追求したものではない。

⑭「膨張性」のモメントは、「国際性・近代化」と「人種主義」のモメントに還元できる。そうすると、この二つのベクトルを縦横両軸とする四次元図式ができ、それによって近代日本の対外思想のあり方を示すことができる。

⑮縦軸の要素は人種・文化・宗教・地理的近接性などで、西洋－東洋の軸であり、横軸の要素は近代化・西洋化の程度、力・技術の達成度などであり、近代化－伝統文化の軸である。

⑯そうすると、理念型としての脱亜主義、アジア・興亜主義は、それぞれ第1象限と第3象限で表されるが、福沢にしる樽井にしる、実際には第4象限よりのところにあったと思われる。東洋盟主論型イデオロギーは、近代化とアジア・東洋という相矛盾する構成要素によって規定されているが、第4象限に位置する。

⑰明治期の南進論は、アジアというよりもグローバルな視点から、自由貿易を基礎においた通商海洋国家としてのビジョンをもとに議論を展開しており、平和的・経済的な手段による日本の発展を強調している。そして、発展してゆくべき「南洋」は、アジアとは別の太平洋地域であった。

⑱南進論は第一次大戦を契機に変容するが、その前の大正政変時の「南進・北進」論争が重要で、南進論は、陸軍の二個師団増設に反対してこれまで以上の北進を批判して、財政整理の立

場から展開された。また徳富蘇峰は、「南北併進論」を提示するとともにアジアのことはアジアで処理すべきであるという道義的帝国主義を打ち出したが、第一次大戦期の南進論は、この道義的帝国主義を受け継ぐ。

⑱第一次大戦期の南進論は、一等国の仲間入りの意識で、日本の重化学工業化のための市場と原料供給地を求めての東南アジア進出が構想される。そして、南洋が大洋州からアジアに包摂されると観念される。アジアは日本の勢力範囲であるから、南洋も日本の勢力圏であり、適切な指導をして、この未開状態を開発することが東洋の盟主としての天職であるとの議論がされるようになる。膨張主義・アジア主義的な傾向が強くなるのである。その意味で、昭和期の南進論の概念装置を用意したと言える。

ii) 早瀬晋三「明治期『南進論』と『大東亜共栄圏』」

①結論的に言えば、南進論が実現できなかったからこそ、アジアの民心が日本軍から離れていたということである。

②南進論には、a 政治的・軍事的側面、b 経済的進出に伴う資源開発的な側面、c 移民植民の三つの側面がある。

③大東亜共栄圏は、a は達成したが、b c はどうであったのか。

④明治期の南進論は現実性に乏しいとされるが、フィリピンに限れば菅沼貞風のように例外もあった。その理由として、a 日本が台湾を領有して、フィリピンが隣国になり、国境を接するようになったこと、b フィリピン革命、フィリピンの民族運動が迫り、日本軍が介入してくること、c 400年前の豊臣秀吉のルソン征伐、徳川家康のルソン征伐計画があったことが、悠長ではなく、軍事占領を唱える南進論を導いた。

⑤杉浦重剛は、『樊噲夢物語』の中で9万人の青年男子をフィリピンに移住させ、フィリピン人と仲良くなって時を待って蜂起するという案を出している。

⑥菅沼貞風は、『新日本図南の夢』の中で、この蜂起して占領した後、天皇に献上するとし、また、砂糖・麻・たばこ栽培に従事する農業出稼ぎ移民を送ると言っている。

⑦福本ミツも西欧追従に反対し西欧の及ばない土地への侵略・進出を唱え、徳富蘇峰も『フィリピン群島』の中で、フィリピンにおける民間主導型の膨張主義を唱えた。

⑧小説の世界でも、末広鉄腸は『南洋の大波乱』において、フィリピンを植民地から解放して天皇に献上するという侵略主義的ストーリーを描いた。

⑨フィリピン革命においても日本の軍部・政府との絡みを持ち、フィリピンへの武器援助の画策、工作員（スパイ）を送りつけたことがあった。

⑩しかし、フィリピンへの南進論の具体的なものはなかった。

⑪昭和10年代に明治期の南進論が復活し、昭和10年、在マニラ日本人会によって日本人墓地で盛大な戦没式とマニラにあった菅沼貞風の墓を移す式が行なわれている。昭和15年に『新日本 南の夢』『大日本商業史』『平戸貿易志』が復刻されるなど、南進の先駆者としての菅沼の地位が確立する。

⑫在留邦人は、戦前にはフィリピンに約3万人、その中ダバオに2万人がいたが、日本の軍部は組織だって利用しようとしなかった。軍政幹部が求めたことは、「比島民衆の亀鑑」つまりフィリピン人のお手本になれとしか言わなかった。在留邦人は、立派な日本人になるために必死で軍に協力したが、それが評価されなかった。「教養低く、礼節乏しい」と見做され、「日本人の体面を汚したる者に対し内地送還せよ」とまで言われた。

⑬また、在留邦人もフィリピン人と仲良くしていたわけではなく、共にアメリカに蜂起するということもなかった。

⑭沖縄県人はダバオでは半分いたが、立派な日本人ではなく、オートロハボンと呼ばれて差別され、この日本人の中での上下関係は、軍人、文官・司政官、内地から派遣の大会社の社員、戦前から居住する内地出身者、沖縄出身者、混血児というランキングであった。

⑮フィリピン人も、キリスト教フィリピン人、白人系フィリピン人、中国系、マレー系、華僑、イスラム教徒、少数民族といったランキングをつくっていった。

⑯フィリピン人の中でも親日的なカリワビ・マカピリといわれた人たちも有効に利用できなかった。

⑰結局、南進論は、政治・軍事的なものは成功したものの、経済はアメリカに依存していて破綻し、移植民活動に伴う人心の把握はできなかったわけで、ここに大東亜共栄圏の虚構性がある。

iii) 波多野澄雄「戦時『アジア新秩序論』と戦後構想」

①第一次大戦期の盟主論的な南進論が、直ちに大東亜共栄圏に結びついたわけではなく、20年代あるいは30年代はじめまでは、経済的な側面を重視し、平和的な考えを基調としていた。

②この南進論が、急進的・軍事的な北進論を抑制したが、満州事変・日中戦争を経てこの機能が失われていく。そして40年代に大東亜共栄圏に吸収されていく。

③19世紀半ばの欧米列強の東アジア支配、すなわち「白禍」に対する日本・朝鮮・中国の共通の苦悩をベースとしてアジア主義の連帯感が生まれてくる。心情的・防衛的であった。

④後藤新平は、対等な日清同盟論を打ち出したが、伊藤博文は、政策とすることは欧米列強の

黄禍論の反発を引き起こし困難であるとした。また、1910年の朝鮮併合が民族解放・平等主義の政策を困難にした。

⑤20年代は国際主義・民族自決主義の時代であり、東洋盟主論のような対外思想は影響力をもち得なかった。

⑥30年代に地域主義が世界の主要な流れになって、「東亜連盟論」・「東亜協同体論」が登場する。「東亜連盟論」は日本・満州・中国三国の平等な立場での連帯の考えであり、日本の覇権、日本の盟主を是認しているわけではない。

⑦日中戦争の目的は、東亜新秩序の建設と言われたが、アメリカとの衝突を避け、この経済ブロックを志向するのではなく20年代の相互依存の経済ネットワークを維持するというものであった。

⑧東アジアにおいて日本がいかに独善的な行動を抑えながら、他方では指導国としての役割を果たしていくかというジレンマがあったが、ここでドイツの地政学が大きな影響を与えた。

⑨ドイツ地政学（Geopolitik）は、生活圏・生存圏・広域経済圏の考え方であるが、1940年に政策科学として日本に入ってきている。この年は、南進政策が国策として打ち出された年である。

⑩東南アジアを含む大東亜共栄圏を正当化するために、地理的・歴史的決定論の地政学が盛んに使われた。

⑪地政学は、a 弱小民族は強い民族によってこそ独立が得られるという強者の論理、b 自民族優越主義、c 生存圏の論理に影響を与えたが、ドイツ地政学が媒介となって大東亜共栄圏の考え方に発展していく。

⑫日本の政策形成者の念頭にあったのは植民地主義の克服であったが、「八紘一宇」や「各々其ノ処ヲ得セシム」という思想が出された。

⑬この日本盟主的なアジア新秩序に批判するグループは、43年11月に大東亜共同宣言を発表して、英米の戦争目的にできるだけ近づけようとするが、大東亜省や陸軍が足を引っ張り、あいまいなものになった。

⑭44年になって、敗北が明らかになり、東南アジアの占領地を手放すことが確実になると、東南アジア・太平洋の英米に対抗して、日・中・ソの提携構想が出てくる。

⑮また、大東亜宣言を洗練していく第二次大東亜宣言が45年4月に出されたが、これはアメリカの国務省が起草したと言ってもさしつかえないような内容になっており、「脱亜入米」の考えになっている。アメリカの描くシステムに日本が入っていくという考え方が外務省に強く見

られたのである。

3. 研究メンバーの研究経過

i) 清水元：「南方関与の経済的側面」に関し、戦前期の東南アジアにおける日本人の経済行動の背後にあった思想について検討を進めるとともに、日本－東南アジア間のモノ・ヒト・カネの動きについて、主として外務省外交史料館所蔵の領事報告、通商局資料に基づき、統計調査を継続中である。

ii) 波多野澄雄：最終年度にあたり、1930年代および太平洋戦争期における陸軍と外務省の「南方関与の論理」を、アジア占領地に対する政策構想の対立としてとらえる観点から、外務省記録および「大本営機密戦争日誌」（参謀本部戦争指導班）を検討した。

iii) 早瀬晋三：1995年9月16日、鹿児島大学南太平洋海域研究センターにおいて、「シンポジウム 近代日本と『南方関与』を組織し、「趣旨説明」および「明治期『南進論』と『大東亜共栄圏』」を公表。同シンポジウムの和文要旨および全記録は近々同研究センターから刊行される。1995年10月18日、「総合的地域研究」総括班主催研究集会「東南アジアの構想力」のコメントーターをつとめる。

iv) 小島勝：「南方関与」の多面性・多重性を示す事例として、特にフィリピン・ダバオにおける沖縄県人子弟と混血二世の教育問題、バギオにおける混血二世の教育問題について聞き取り調査を継続しながら研究を進め、また、「南洋」・「南方」などと呼称された事由について検討した。戦前の国定教科書に記述された「東南アジア」の内容についても検討した。

4. 研究の成果とフロンティア

先述のシンポジウムでの発表内容、6. の研究業績に見られる知見が成果であり、フロンティアも含まれている。

5. 今後の課題

3年間の研究活動により、これまでの各自の研究をより進展させ、相互の交流を通して多大の刺激を受けることができた。3年目は、南方関与の「論理」を析出するのに実があったと思う。①「アジア主義」との非連続性、②明治時代の「無告の民」への評価、③大正時代の「南進論」の特質、④大東亜共栄圏構想と南方関与との関連性、⑤戦後の日本人の東南アジア進出

につきまとう精神性と戦前の「南進」との連続性、⑥南方関与を行なった個々の日本人や個々の進出企業の個別研究という当初の課題は、今後なお継続的に研究されなければならないが、関心を共有するメンバーがこの時期、共同研究に携われたことは有意義であった。これからも、①日本国内の政治・経済・軍事・教育・文化などと「南方関与」の制度化との連関性、②本土の日本人、沖縄県人、日本統治時代の台湾・朝鮮人、日本人との婚姻関係をもつ者およびその子弟などの多重性をもつ「日本」の南方関与の分析、③大陸部と島嶼部、植民地宗主国別などの「南方」の中での地域差にもとづく「論理」の比較対照、④日本人の職種別・社会階層別の「論理」の比較対照などの検討課題をも加味しながら、より一層「南方関与」研究を深化させたいと願っている。

研究成果報告書を、目下執筆中である。

最後になりましたが、3年間お世話になりました事務局の先生方・職員の皆様に厚くお礼申し上げます。

6. 研究業績（平成7年度発表分）

小島 勝

「『南洋』・『南方』概念について」重点領域研究『総合的地域研究』総括班編『「総合的地域研究」成果報告書シリーズ』11: 12-21, 1996.

「戦前の上海における浄土真宗本願寺派開教使の足跡」『大谷大学真宗総合研究所研究紀要』12: 111-126, 1995.

「海外子女教育の社会学」竹内洋・徳岡秀雄編『教育現象の社会学』世界思想社, pp.168-186, 1995.

『海外子女をとりまく教育環境の多様化と変容に関する比較研究－マレーシア調査報告』国際交流研究会(代表・小島勝), 232p, 1995.

清水 元

「近代日本とアジア－南進論の諸相」正田健一郎編『日本における近代社会の形成』三嶺書房, pp.123-149, 1995.

「アジア海域と近代日本－西海を中心として」川勝平太編『日本史を海域から洗う』南風社, 第4章(61p分), 1996(近刊).

Southeast Asia in Modern Japanese Thought: Essays on the Japanese-Southeast Asian Relationship, 1880-1940, 261p, 1996 (近刊).

波多野澄雄

- 「重光葵と大東亜共同宣言」『国際政治』109: 38-53, 1995.
- 「『朕茲ニ寺体ヲ護持シ得テ・・・』－国体護持とポツダム宣言」『外交時報』1320: 28-43, 1995.
- 「日中戦争の遺産と負債」増田弘・波多野澄雄編『アジアのなかの日中関係』山川出版社, pp. 20-33, 1995.
- 「『地域主義』構想の戦前・戦中・戦後」重点領域研究「総合的地域研究」総括班編『「総合的地域研究」成果報告書シリーズ』11: 8-11, 1996.

早瀬晋三

- 『フィリピン行き渡航者調査(1901~39年)－外務省外交史料館文書「海外渡航者名簿より」重点領域研究「総合的地域研究」総括班編『「総合的地域研究」成果報告書シリーズ』8, p. 141, 1995.
- 「近現代日米貿易のなかの東・東南アジア」重点領域研究「総合的地域研究」総括班編『「総合的地域研究」成果報告書シリーズ』11: 23-26, 1996.
- 「東南アジアの構想力－コメント」重点領域研究「総合的地域研究」総括班編『「総合的地域研究」成果報告書シリーズ』9-13, 1996.
- 『東南アジア研究を考える』（青山亨・澤田英夫と共編著）東南アジア史学会関西例会, p. 52, 1995.
- 「二つの大国アメリカと日本に翻弄されたフィリピン」萩原宜之・後藤乾一編『東南アジア史のなかの近代日本』みすず書房, pp. 33-51, 1995.
- 『東南アジア史学会 関西例会通報 総集編9』（澤田英夫と共編）東南アジア史学会関西例会, p. 24, 1995.
- 「『ダバオ国』の在留邦人」池端雪浦編『日本占領下のフィリピン－「大東亜共栄圏」の虚構と傷跡』岩波書店, (印刷中).